

2024(令和6)年度 カリキュラム (予定であり、変更になる場合があります)

修了要件 30単位以上(必修:11単位/選択:19単位以上)

学修方法 選択可(学修方法が1つの科目は選択不可) R:レポート S:スクーリング

開講年次	科目名	単位数		授業料(円)	学修方法(選択可)		スクーリング 受講料(円)	備考
		必修	選択		R	S		
1年次	原理科目群							
	仏教と共生原理		2	22,000	○	○	15,000	
	社会福祉原理研究		2	22,000	○	○	15,000	
	社会福祉制度政策研究		2	22,000	○	○	15,000	
	実践理論科目群							
	ソーシャルワークの基礎	2		22,000		○	15,000	
	個人や家族のソーシャルワーク		2	22,000	○	○	15,000	
	グループを活用したソーシャルワーク		2	22,000	○	○	15,000	
	ジェネラリストソーシャルワーク	2		22,000		○	15,000	
	ソーシャルワークケースマネジメント		2	22,000	○	○	15,000	
	コミュニティを基盤としたソーシャルワーク		2	22,000	○	○	15,000	
	ソーシャルワークアドミニストレーション		2	22,000	○	○	15,000	
	ソーシャルワークスーパービジョン		2	22,000	○	○	15,000	
	関連領域科目群							
	家族支援特論		1	11,000	○	○	7,500	
	グリーフケア特論		1	11,000	○	○	7,500	
	アントレプレナー特論		1	11,000	○	○	7,500	
	国際社会福祉特論1		1	11,000	○	○	7,500	
	国際社会福祉特論2		1	11,000	○	○	7,500	
	リサーチ科目群							
	ソーシャルワークリサーチ総論	2		22,000		○	15,000	
	ソーシャルワークリサーチ各論		2	22,000		○	15,000	1年次履修推奨
	量的分析方法特論		1	11,000	○	○	7,500	
質的分析方法特論		1	11,000	○	○	7,500		
プログラム評価特論		2	22,000	○	○	15,000		
フィールドワーク演習	1		11,000		○	7,500	特定課題研究演習と連動	
2年次	特定課題研究演習	4		44,000	-		-	正科生のみ

備考(正科生のみ)

- ・ 下位学年の開講科目はどの科目でも履修できます。
- ・ 履修途中の科目は次年度以降の再履修になります。
- ・ 履修1年目の科目(スクーリング科目を除く)の単位を修得できなかった場合、翌年度に同一の学習方法で履修を継続する場合に限り、履修1年目の合格実績を2年目にのみ持ち越すことができます。この場合、履修2年目に関しては、授業料を納入する必要はありません。

2024(令和6)年度 カリキュラム (予定であり、変更になる場合があります)

<科目概要>

科目名	概要
原理科目群	
仏教と共生原理	本科目では、仏教と「共生」の原理を学修し、学修者自身の共生観を構築することを目的としている。今日、様々な分野で「共生」が主張されているが、裏を返せば、いまこそ共生が考えられなければならない、ということになる。そこで、本科目では、仏教文献の中に見られる「共生」について、個人の生き方・社会との関わり方という視点をもって、学ぶ。最終的な到達目標は、仏教思想の現代的意義を考え、他職種・他機関との協同・連携力を身につけることにある。
社会福祉原理研究	本科目は、社会福祉理論と社会福祉の歴史を考えることを通して、社会福祉の原理を学び、必要な実践力、指導・管理能力の土台となる理論的基盤を身につけることを目標とする。そのために、代表的な社会福祉理論と歴史に関する文献を読み込み、内容に対する理解を深め、批判的検討を行う。このことを通して、社会福祉とは何かという問いに自分なりの答えを見つけ出し、自分なりに社会福祉を体系的に説明できるようになる。
社会福祉制度政策研究	社会福祉政策の幅広い問題を対象として、履修者が選んだ課題(複数)に対して履修者が小論文を書き、担当講師がコメントを述べる。履修者はコメントに対応して小論文を改定する。この繰り返しを経て小論文を完成させる。その過程で履修者は選んだテーマについて、①現状や課題を的確に把握し、②自分の考えを発展させ、それをサポートするエビデンスを集め、③論理の飛躍なく、かつ、分かりやすい文章と付加価値の高い図表で小論文を作成することが求められる。そのスキルは社会福祉学に関する専門的な内容の論文執筆に欠かせないものである。
実践理論科目群	
ソーシャルワークの基礎	ソーシャルワークは、1900年代前半にアメリカにおいてM.リッチモンドによって「ソーシャル・ケースワークは、人間とその社会的環境との間に、個別的に、効果を意識して行う調整によって、その人間の人格を発達させる諸過程からなる」と定義され、方法が理論化された。その後、新たなソーシャルワーク理論が様々な学派から提案され、展開されてきた。また、定義についても国際ソーシャルワーカー連盟によって、再定義され、改訂を繰り返しながら現在の「ソーシャルワークのグローバル定義」に到達した。 本科目は、ソーシャルワークの理論、定義の歴史の変遷について理解し、現在の課題と今後の方向性について考察を深めることを第一義的目的とする。さらに、自身のソーシャルワーク実践をソーシャルワーク理論から説明できるようになることも目指す。
個人や家族のソーシャルワーク	ソーシャルワークは、人と環境との関わり合いを常に複眼的に捉え、人々の生活や人生に関与する、極めて実践的な領域である。本講義では、ソーシャルワーク実践の中核となる個別支援(ケースワーク)について、歴史的な史実も踏まえて、ジェネラリスト・ソーシャルワークやミクロからマクロまでのソーシャルワーク理論に依拠しながら、事例も交えて体系的かつ実践的に学ぶことを目的としている。 本科目の到達目標は、上記目的を達成することを通して、困難事例に対する高度なソーシャルワーク技能、他職種・他機関との協働・連携の知識を理解すると共に、社会福祉の現場における当事者のニーズを把握する調査能力、福祉資源開発力、ネットワーキング力等を身につけることにある。
グループを活用したソーシャルワーク	グループワークを机上の学問とせず実践的な理論とともにグループワークスキルを獲得し、アドバンスソーシャルワーカーを目指す。 グループワーク理論の成り立ちや主要概念・方法論を学び、それを踏まえ自身の実践を省察・評価、自らの実践課題を説明できるようになることを目標とする。 目標に向けて、ソーシャルワークの発展の中でのグループワークの歴史的経緯、グループワークの意義や理論の変遷及びその効果を理解し、実践において活用できるよう方法論としてのグループワーク技術を学ぶ。
ジェネラリストソーシャルワーク	現代社会は、家族・地域の紐帯の弱体化、大震災・大災害などを背景に、生活困窮、虐待、アディクションなど社会的排除の危険に晒される人々が増加している。本講は、このような人々の苦しみを、ミクロ・メゾ・マクロ環境との交互作用からとらえ、エンパワメント、ストレングスに依拠するジェネラリスト・ソーシャルワークを紐解く。

2024(令和6)年度 カリキュラム (予定であり、変更になる場合があります)

<科目概要>

科目名	概要
ソーシャルワークケースマネジメント	本科目では、ソーシャルワークの視点からケースマネジメントの理解を通して、様々な課題を抱えながら地域で生活する人々への支援のあり方について検討する。具体的には、ケースマネジメントが必要とされる背景について学び、どのようなニーズに対してケースマネジメントを活用することが必要かについての理解を深める。そのうえで、ケースマネジメントの機能として、アセスメント、サービス支援計画、モニタリング等の詳細について学ぶ。以上を通して、困難事例に対する高度なソーシャルワーク技能、他職種・他機関との協働・連携の技能について、理解することを目指す。
コミュニティを基盤としたソーシャルワーク	地域社会の変質に伴い、様々な生活上の課題を抱えつつも、地域で自立した生活を営むためには、地域での生活を支える様々な社会資源の開発やネットワーク、地域における合意形成を進めると共に地域社会そのもののあり方の変更を促していくことが重要となる。本講では、コミュニティを基盤としたソーシャルワークの理論を学ぶ共に、その具体的なプロセスについて具体的な実践例を踏まえて理解を深めることを目的とする。
ソーシャルワークアドミニストレーション	ソーシャルワークは、対人的援助関係に基づいて支援が行われるのが一般的である一方で、様々な集団・組織に所属して行われている。本講では、ソーシャルワークが編成され、展開される場である「組織」に注目し、組織内のモチベーション形成、組織内の他の専門職との連携及びヒト・モノ・カネ・情報といった組織マネジメント、さらにはニーズに適した組織づくりや地域・社会への働き掛けといったソーシャルマーケティング等のソーシャルワークアドミニストレーションの理論と実際について理解することを目的とする。
ソーシャルワークスーパービジョン	スーパービジョンとは、専門職としてのソーシャルワーカーを養成するためのトレーニング・プロセスである。本講は、スーパービジョンの理論と方法を学び、実践の場でスーパービジョンを展開する技術を身につける。新人研修・実習プログラムの立案や指導方法を学修し、社会福祉現場やその組織において指導的立場として活躍できる力を養う。
関連領域科目群	
家族支援特論	今日、多くの家族が様々な困難に直面している。本授業では、その家族を支援する際に有用な様々な理論を踏まえて、基本的な支援方法や具体的な実践方法の習得を目指す。また今後の課題についても検討し、ソーシャルワーカーに求められる家族支援のあり方を探究していく。
グリーフケア特論	グリーフとは、大切な人やものを失くした際の深い悲しみである悲嘆のことを指す。大切な人やペットなどの命の喪失、病気や事故などによる身体の一部の喪失、環境の変化による喪失等々、人生において人は様々な喪失から悲嘆(グリーフ)を経験する。本授業では、人々のグリーフに寄り添い向き合うための具体的な方法論について理解を深める。また、具体例なども通して、ソーシャルワーク実践に活かせるグリーフケアの実践方法を学ぶ。
アントレプレナー特論	ソーシャルワークの実践は、生活問題を発見し、その解決緩和に向けて実践をアレンジメントして事業化するという歴史的経緯を有している。本講ではそのような社会的起業の側面を有するソーシャルワーク実践の側面に注目し、その事業の起業化の理論や方法について理解を深める。特に近年、NPOから営利的要素が強まった「社会的企業」等の新たな主体が出現しており、またその組織を担う社会的起業家の存在に注目が集まりつつある。このような問題解決のイノベーションを担う組織や人にも注目して理解を深めることを目的とする。
国際社会福祉特論1	本科目では、海外における社会福祉制度やソーシャルワーク実践の動向について学ぶ。オムニバス科目であるため、担当教員の専門や研究テーマの海外研究の動向、また海外の研究をどのように自身の研究に役立てているか、という観点からレクチャーを行う。受講生は、そこからそれぞれの海外研究の動向や、海外研究の知見を自身の研究にどのように役立てていくかを考察し、最後にプレゼンテーションを行う。
国際社会福祉特論2	ソーシャルワーク理論・実践は日本固有のものではなく、海外において構築されてきた。その観点からすると、ソーシャルワークを基盤とした研究を推進する際、先行研究レビューにおいて海外の文献を参照し、自身のテーマの知見を深めることが望まれる。そこで本科目では、海外文献の検索とレビューの方法の基礎について学び、その方法を身につけ、そこから自身のテーマに関連した海外の文献のレビューをまとめることを目指す。

2024(令和6)年度 カリキュラム (予定であり、変更になる場合があります)

<科目概要>

科目名	概要
リサーチ科目群	
ソーシャルワークリサーチ総論	<p>ソーシャルワーカーには、理論実践の統合を目指し、当事者のニーズにたった援助技法や理論の開発・展開、新たな福祉制度・政策デザインの構築のための調査・研究力が求められる。本講義では、社会福祉学・ソーシャルワークにおける研究の目的・特徴・範囲、研究倫理をふまえた上で、文献研究の方法、量的(統計)調査法、質的調査法の基礎についてまず総論として理解することを目標とする。社会福祉現場及びソーシャルワーク実践における当事者のニーズを把握する調査能力や福祉資源開発の根拠を示すためのエビデンスを得る方法・技術に関する知識を身につけるための基礎的な理解を目指す。具体的には、個人の実践の経過、判断・行動の根拠、成果と課題等について客観的に記述・言語化し、検証するための企画(リサーチデザイン)、研究仮説の設定と検証、研究方法の適切性の吟味、先行研究の資料収集及び精査の方法等を学び、自らの研究計画を作成する。この方法・技術に関する知識を身につけることは、実践の評価等に応用が可能であり、根拠をもって社会福祉学に関する専門的な内容の論文執筆を行うための知識となる。ソーシャルワーカーがリサーチの技術を必要とする意味、ソーシャルワークにおける先行研究のレビューの方法、リサーチのデザイン(研究の設計と手順)、量的・質的なデータの分析方法を身につけられるよう取り組む。</p>
ソーシャルワークリサーチ各論	<p>ソーシャルワーカーには、理論実践の統合を目指し、当事者のニーズに立った援助技法や理論の開発・展開、新たな福祉制度・政策デザインの構築のための調査・研究力が求められる。本講義では、社会福祉学研究の目的・特徴・範囲、研究倫理を踏まえた上で、量的(統計)調査法、質的調査法を実践する基盤となる知識・技術を習得する。また、高度専門職として求められる実践と研究の両立に向けて論文執筆のための企画(リサーチデザイン)、研究仮説の設定と検証、研究方法の適切性の吟味、先行研究の資料収集及び性差の方法等を学び、自らの研究計画を作成する。</p>
量的分析方法特論	<p>ソーシャルワークリサーチ総論・各論の学びをもとに、修士論文及び特定課題研究を執筆するにあたり必要な量的な分析方法に焦点を当てて、学ぶ科目とする。量的分析方法としては、分析に必要なデータセットの作成からSPSSやRといった統計分析の実施に必要なソフトウェアの操作方法を理解する。また、実際の量的分析方法として、変数の特徴や分析の目的に合わせて、単変量・2変量・多変量解析を学び、統計分析のソフトウェアを用いて分析を実施できるようにすることを目標とする。</p>
質的分析方法特論	<p>ソーシャルワーク・リサーチにおいて、質的分析は、特定のケースの理解を目的とする探索的リサーチ、社会福祉に関係する問題や現象の把握、問題発生の原因、要因の探求などに有効である。本講では、事例研究法(ケーススタディ)、バイオグラフィー、エスノグラフィー、グラウンデッド・セオリーなど、様々な質的分析方法を学ぶ。この学びは、自らの研究を探索するために妥当な研究方法を探索することにつながる。</p>
プログラム評価特論	<p>ソーシャルワークの実践現場では、ミクロレベルからマクロレベルまで、様々な実践や支援、介入の活動が行われる。これらの活動に対しては、ソーシャルワーカーとしての説明責任あるいは効果等の科学的な根拠が求められるようになってきた。本授業では、ソーシャルワークの様々な実践活動を“プログラム”として、その客観的な効果等を評価し、これら諸活動の更なる質の向上に資するための方法論について学修する。また、具体例なども通して、実際の評価方法についても学ぶ。</p>
フィールドワーク演習	<p>本科目は社会福祉の実践現場を通して受講者自らの実践を振り返り、スーパービジョンを受けることによって涵養することを目的とする。フィールドワーク対象範囲や指導教員の専門領域を考慮しつつ、自らの問題意識に立って、実習・調査テーマを設定しフィールドワークを行う。既にソーシャルワーク実践に従事している場合は、そのフィールドにおける実践および調査の目標を立て、スーパービジョン等を通して学ぶ。</p>
特定課題研究演習	<p>演習を通して院生の問題意識・研究するテーマに従って特定課題研究を書くための指導を行う。従って演習で特定課題研究に関する研究に関する発表を求め、他に受講者がいる場合、その発表に対して意見等を受ける形式で進められる。特定課題研究の執筆の流れとしては、研究テーマの設定と適切な研究方法の検討、研究計画の立案、先行研究文献・データの収集と分析(精査)、調査等を実施する場合の調査設計・実施・分析等への助言・指導、ドラフト作成・本文執筆にあたっての助言・指導を行う。なお特定課題研究の指導に関しては教員が各専門領域に応じて行う。詳細について担当教員の指示に従うこと。到達目標は高度なソーシャルワークに関する研究力・実践力を身に付け、社会福祉学に関する専門的な内容の論文執筆指導を受け、特定課題研究を執筆することができることである。</p>